

## 「へっぽこ先生 宇中での川上澄生」

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司

版画家として名高い川上澄生は、本職が教師であり、自らを「へっぽこ先生」と称した。へっぽことは、技量の劣った者の意であるが、もちろん謙遜して言ったものである。へっぽこ先生と自称したのは、教師になるまでの彼の履歴が他の教師とは変わっていたことによるようだ。

川上澄生は、明治二十八（一八九五）年四月八日、横浜に生まれる。私立青山学院高等科卒業後、私用にてカナダにわたり、さらにアラスカにおいて鮭缶詰製造人夫となった。帰国後看板の図案を描き毛織物問屋の番頭をするなどして、大正十年、旧制宇都宮中学校（現宇都宮高校・以下、宇中）教師となったのである。

澄生が教師になったのは、青山学院高等科卒業後の不安定な生活に見切りをつけるためであったという。それが宇中の教師になったのは、宇中で英語教師の欠員があり、しかも

たまたま青学時代の友人、篠崎孝が宇中の教師をしており、教員の求人を見母校青学に求めていた偶然によるものであった。

宇中で澄生は英語を受け持ち、野球部の副部長となった。篠崎孝が部長を務めていたので副部長に割り当てられたという。彼はへっぽこ先生どころか、真面目な良き教師として生徒に慕われた。英語の授業、野球部の指導ともに手抜きはせず、また、版画に興味をいだく生徒があれば、寸暇を惜しんで手ほどきをした。生徒からは、「ハリさんのニッケネームを頂戴した。坊主頭がハリネズミに似ていたからという。

教え子たちの思い出話では、異口同音に毎時間の豆テストのことが話題に出る。野球部にあつては指導の甲斐あつて大正十三（一九二四）年甲子園出場を果たし、準々決勝進出を成し遂げている。これは現宇高野球

部も含め未だ破られていない大記録である。

澄生は宇中教師着任後、ほどなくして鶴田駅の近くに居を構えた。六畳と四畳半の家で玄関もなくガラス戸をあけて座敷に上がると澄生一人分の空間があるだけ。あとは本、コーヒー茶碗や身の回り品が雑然としていたという。しかし、そこが澄生にとつて、またとない版画創作の場であり時間となったのである。

澄生の生活は、授業が終わると野球部の指導に明け暮れ、帰りは暗くなつてからである。夕食後は毎時間施した豆テストの採点に追われ、「いたづら」が出来るのはその後の数時間だったという。いたづらとは、もちろん版画制作等である。幸いというか澄生は、しばらく独り身であった。自宅での生活は、誰にも邪魔されることのない、気の向くままに過ごせる貴重な時間となり、「いたづら」に没頭することが出来たのである。

お陰で澄生は、版画制作に本格的に打ち込めるようになった。そうした中、大正十四（一九二五）年第五回画創作協会展で、「初夏の風」が入選を果たす。棟方志功を版画の道に向かわせた作品である。

こうした宇中での生活も昭和十七（一九四二）年、終止符を打つ。宇中に派遣された配属将校の態度に嫌気がさし、敢然として辞表を提出したのである。権力におもねることを良しとしない川上澄生の気骨ある生き方であった。



鹿沼市立川上澄生美術館蔵  
©川上さやか

へっぽこ先生の図



鹿沼市立川上澄生美術館蔵  
©川上さやか

野球大会の図